

ドイツ・イギリス訪問記

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おおいし ひさかず 大石 久和

今年2018年の4月21日から27日にかけて、土木学会会長としてドイツ工学会と、イギリス土木学会を訪問し、インフラ整備に関して意見交換を行ってきた。これは、その報告である。

先進国のなかで日本だけが財政問題を理由として公共事業費を削減し続け、「コンクリートから人へ」を掲げた民主党政権で落ち込んだ事業費をいまだに回復できないでいる。しかし、ドイツもイギリスも財政が楽なわけではないのに、また、わが国よりもインフラの蓄積量が多いにもかかわらず、着実にインフラを整備してきている。

両国を訪問しようと考えたのは、ドイツやイギリスはどのような考え方でインフラ整備をとらえているのかという関心があったからである。

その両国への関心事項は、

- ①土木技術者の社会的な位置付けや評価は、わが国と比較してどうなのか
- ②インフラ整備の経済への影響をどのように説明しているのか
- ③インフラ整備の評価を如何に行っているのか
- ④地球温暖化の影響からか気象は世界的に凶暴化しているが、それに土木は如何に対応しているのか

さらにドイツについては、土木や機械などごとの独立の学会を持たず、工学全体でまとまっているが、それはなぜなのかなどであった。

ドイツ工学会

(Institute of German Engineers)

ドイツ工学会はミュンヘンにある。工学会会長のヘルマン氏は、われわれを最近完成したドイツ最高峰ツークシュピッツェ頂上へのロープウェイに案内し、3つの世界記録（高度差、ケーブル支柱間の距離、ケーブル支柱の高さ）を達成できたのは、質の高い土木技術の成果だと強調した。

会長の説明によると、ドイツ工学会はインフラ政策の提言の草案を策定したりする、基準の策定を行う、技術者の処遇の改善を提言するなどといった業務を行っているという。わが国の技術士会のように、工学全体でまとまることを大切にしている感じであった。

ミュンヘンはバイエルン州にあるが、訪問の数週間前に組織が改編された州の「住宅・建築・道路省」と意見交換を行った。「主要幹線道路計画は国がオーソライズする」「州の道路事業費は、維持補修が6新設が4という比率」「大型車課金の路線をアウトバーン以外の国道にも拡大して財源に」といった内容をヒアリングした。

ドイツからイギリスへはユーロトンネルを渡ろうとしたのだが、あいにくフランス国鉄のストライキのために断念し、シュトゥットガルトから空路によることとし、ICEを利用して両都市間を移動した。

シュトゥットガルト駅では、駅の大規模な地下化

工事に驚いてしまった。この町の都市計画では「風の道」整備が有名ということだが、まさにそのための大土木工事が行われていたのである。必要だと考える土木はキチンと行うという当然の常識が、(わが国では失われているが) ここでは生きているという印象だった。

イギリス土木学会 (Institution of Civil Engineers)

イギリスではロンドンの真ん中にある有名な英国土木学会本部の立派さにまず驚いた。伝統あるイギリス土木の象徴であり、土木の博物館だった。イギリスはBBCが行った世論調査において、「過去のイギリス人でイギリスが最も誇りとする人は誰か」との問いに、チャーチルに次いで土木家のブルネルが二位に入る国柄なのだ。

紳士とはこのような人を指すのかという雰囲気を持つメア会長との意見交換では、インフラ整備が経済に直結しているという認識のもとに、政府(財務省)での審議において、学会がインフラ投資議論に積極的に関与していることが印象的だった。なお、イギリスには国土交通省は存在せず、財務省内部にインフラ・プロジェクト庁がある。

今後とも両学会間の関係強化を進めていくことで合意し、更新した協定にサインした。イギリス土木学会は今年200周年を迎える。いろいろな企画を展

開中とのことだったが、そのなかで、土木技術者を「Invisible SuperHEROES」と表記していたことには、大きな賛意を覚えたのだった。土木という縁の下の力持ちの重要性を「目には見えない超英雄」としてキチンと認識しようとする活動に強く共感したのである。

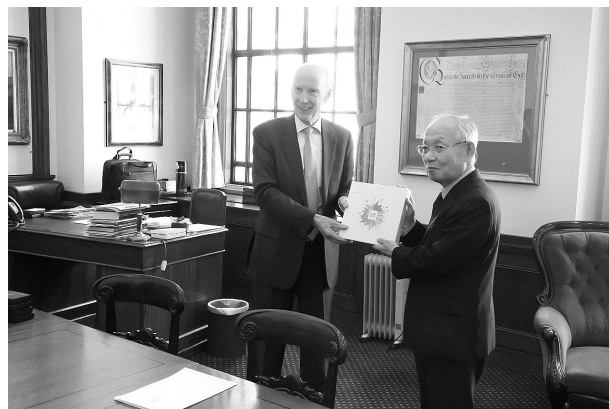


写真-2 メア会長・大石会長

訪問後記

ロンドンでも東西への地下鉄の延伸を進めていたし、ドイツ・シュトゥットガルトにも大土木工事はあったように、両国とも現状を改善するためのインフラ整備努力を怠ってはいないという印象が強烈だった。

今回、イギリスの鉄道博物館を訪問したが、車両の展示があるのは当然にしても、驚いたのは建設工事中のジオラマが展示してあり、子供たちが見ることができるよう低い位置にのぞき窓があって、作業の様子を拡大して見ることができるよう工夫していたことである。いま便利に鉄道が利用できるのは、こうした土木の苦勞の賜物だと示しているのである。日本の鉄道博物館に工事中の様子を示した展示はあるのだろうか。



写真-1 英国土木学会本部前にて